武蔵野日曜集会
言霊（二）
――ヨハネ伝第１章１～18節――

１９９６年２月25日
小池辰雄

言霊　キリストに圧倒されて生きている　神交　召団讃歌Ａ51「受肉のキリスト」　召団讃歌Ａ49「主さまあなたは」　召団讃歌Ａ52「エン・クリスト」　キリスト讃美　福音の原点に帰ろう

【ヨハネ１】（私訳）

1 元始に言霊（ロゴス）があった。そして言霊は神のみ許に在った。而も言霊は神であった。2 彼は元始に神のみ許に在った。3 もの皆は彼に由って成った。成ったもので彼に由らずして成ったものは絶無である。4 彼には生命があった。その生命は人の光であった。5 しかも光は闇の中で照らしているのに、闇はこれがわからなかった。6 或る人が現れた。彼は神から遣わされたのである。その名はヨハネという。7 彼は証のために来た。光について証をなし、すべの者が彼に因って信ずるためであった。8 彼は光ではなかった。光を証するためであった。

9 まことの光があった。それは世に来る万人を照らすためであった。10 彼は世に在った。世は彼に因って成った。然るに世は彼を認めなかった。11 彼は彼の族に来たのに、彼の族は彼を受け入れなかった。12 凡そ彼を受け入れた者たち、即ちその名を信じた者たちには神の子らに成る権威を彼は与えた。13 これらの者は血統からでもなく、肉の意欲からでもなく、人間の心根からでもなく、唯だ神から生まれたのである。14 さてその言霊は肉体となり、我らの間に宿った。かくて我らは彼の栄光を、即ち父の独子の栄光と恩恵と真理に満ちたものを見た。15 ヨハネ彼について証をなし、呼ばわって言う「『わが後に来たる方は私に優って居られる、私に先んじて存在していたからである』と私がかつて言ったのは此の人である」16 我らは皆その満々たる中から受けて、恩恵に恩恵を増し加えられる。17 律法はモーセによって与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによって臨んだ。18 未だに神を見た者はない。唯だ父の懐裡に在す独子なる神のみがこれを体現し給うた。

●言霊

今日はヨハネ伝1章1節から、「言霊（ことだま）」という主題でお話します。私はヨハネ伝1章のこのところを自分で訳しました。

「太初（はじめ）に言葉（ことば）あり」

という、「言（ことば）」では本当は訳が弱い。この「ロゴス」というギリシャ語は「言」と訳したら、薄っぺらくてだめなんです。これはこの場合、深い意味を持っているので、私は「言霊（ことだま）」と訳します。「ロゴス」を言霊と訳している人はほとんどいないでしょう。

キリストは、自分の言には生命があるという。

「わが汝らに語りし言は霊なり生命なり」（ヨハネ6・63）

とキリストが言ってらっしゃる。正にイエス・キリストの言は「霊なり生命なり」で、人に霊を与え、生命を与える。

「言霊（ことだま）」という言葉はもともと醍醐（ごだいご）天皇の『大鏡』の中に出でくる言葉です。

「日（ひ）の本（もと）の国は言霊（ことだま）の幸（さき）はふ国」

という。言霊というのは、言葉の中に霊妙な力がある。神の霊が宿っている。霊的な力のある言葉です。言霊の本当の具現者はイエス・キリストです。キリストの言の中にはそういう霊妙な力が宿っている。だから、

「わが言は霊なり、生命なり」

という。キリストが何か言うと、病気が治ってしまう。また、魂のおかしいのが癒されてしまう。

「同情」という言葉がある。同じ情（こころ）となることです。相手の人と同じ情況に自分をおく。そしてそれを担っていく。これが本当の愛なんです。戦うことではない。ユゴーの『レ・ミゼラブル』を読んでも、そういう面がある。コゼットという小女の中にはそういう霊がある。

我々は、信じ仰ぐという「信仰」ではだめです。信仰ではなくて、キリストの中に自分を投げ入れるんです。何でも相手を対象化しているうちはだめです。一如の世界、一つにならなければ。キリストは我々罪びとと同じどん底に入って、彼自身が罪びとになった。そして、私たちを癒してしまった。そういうように、同じ情況になっている。相手と同じ情況に自分をおく。そして、その情況において相手の情況を変えてしまう。変えるためには、自分の中にもの凄いものがきてなければだめです。それは正にキリストと一如ということです。

●キリストに圧倒されて生きている

「信ずる」という言葉が非常に観念的なんです。「信仰」だとか、

「私はキリストを信じています」

なんていうのはだめなんだ。

「私は信仰なんかありません。キリストと一つにされるだけの話です、圧倒されるだけです。キリストに圧倒されて生きています。自分には何もありません」

と私は言ってやる。昔の無教会の時には、

「自分の信仰がどうだこうだ」

とか、

「信仰が大事だ」

と散々言われた。あれは本当はだめなんだ。

自分の側には何もない。ただ圧倒される。圧倒されて力がくる、光がくる。我々は太陽の光に圧倒されているんだ。太陽の光がやってくるから、光がわかる。

光といえば、キリストこそが本当の光のひとです。どんな闇でも、キリストの在るところは明るいところになってしまう。私の母は失明しましたけれども、

「また目が見えるようになりたい」

と一言も言わなかった。がまんしていたのではない。やはり、内なる光をいただいたんです。霊的な光というのは素晴らしいものです。

霊妙な力の宿っている言葉が言霊なんです。だから、

「はじめに言あり」

ではだめなんだ、

「はじめに言霊（ことだま）あり」

と訳さないと。その言霊の具現者はイエス・キリストです。その中に神の霊が宿っているから。

●神交

だから、キリストを「信じて」いるのではない。キリストに投入しなければ。自分を投げ入れなければ。

「私は信じてなんかいません、信仰なんかありません。私はキリストに圧倒されて、キリストの中に自分を投げ入れています」

という。キリストにとっ捕まってしまった。そういう一如の世界です。信じ仰いでいる「信仰」ではだめなんだ。

もし「しんこう」と言うなら、「神交」と書いたらいい。神・キリストと霊的に交わっている。キリストの中に入れられている。溶かされている。融合している。溶け込んでしまっている。そういう神秘的なことを言うと、昔の無教会は非常にそれを否定する。

「信仰の世界は神秘なんて言ってはだめだ」

なんて言う。ところが、私はシュヴァイツァーを読んだら、彼はそういう神秘の世界を非常に評価していた。ドイツ人では珍しい。

我々は、
「キリストを信ずる」
のではない。
「キリストの中に自分を投身してキリストと一つになる」
それが本当の神交、神交わりの世界です。祈りは、黙ってキリストの中に自分を投げ入れる。
「アーメン、ハレルヤ！」
だけでもう、何も言うことはない。キリストは無条件で入れてくださる。傲慢な魂はだめですよ、傲慢はサタンだから。平伏して投げ身することです。
エレミヤ記31章に素晴らしい言葉がある。
「遠方よりエホバ我に顕れていいたもう。我窮なき愛をもて汝を愛せり。故にわれたえず汝をめぐむなり。」（エレミヤ31・3）
また、18節にもおもしろい言葉がある。
「18 **われ固にエフライムのみずから歎くをきけり。云く汝は我を懲しめたもう。我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受けたり。エホバよ汝はわが神なれば我を牽転したまえ。然らば我転るべし。19 われ転りし後に悔い、教を承しのちに我が脾を撃つ。我れ幼時の羞を身にもてば恥じかつ辱しめらるるなりと。」**
（エレミヤ31・18～19）
エレミヤというのは人間性の深い人です。私は旧約の預言者の中ではエレミヤが好きだね。
「ああ我わが首を水となし、我が目を涙の泉となすことをえんものを。我が民の女の殺されたる者の為に昼夜哭かん。嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを。我が民を離れてさりゆかん。彼らはみな姦淫するもの悖れる者の族なればなり。」（エレミヤ9・1～2）
迫害を受けた事に対する深い悲しみと愛の心が現れている。

●召団讃歌A51「受肉のキリスト」

私は受肉のキリストのことを歌った自分の詩がある。これは讃美歌538番「過ぎゆくこの世」の歌調で歌えます。

召団讃歌A51「受肉のキリスト」（1988/8/5 作詞）

1　永遠の太初に　言霊ありき
　言霊　神と　共に在りけり
2　言霊の性　神性にてあれば
　よろずのものを　成り出でしめぬ
3　言霊　生命　生命は光
　光は闇に　うち勝ちたるぞ

4　まことの光体　世に現われぬ
　世はそを知らず　み民も受けず
5　言霊　肉と　成りて幕屋を
　われらの中に　張りて宿りぬ
6　彼れの聖名をば　信ずる者は
　神の子たるの　めぐみを受くる
7　かくてみ神の　独子イエスは
　恩恵と真法　体現したり
8　父なる神の　みふところなる
　キリストこそは　神の顕現！

●召団讃歌Ａ49「主さまあなたは」

私は自分で言ってはおかしいけれども、知らないまに随分色々な歌を作ってしまった。

召団讃歌Ａ49「主さまあなたは」（1988/8/3 作詞　讃美歌48「しずけき夕の」の歌調）

1　十字架・聖霊の　主さまあなたは
　我れを救いて　戦わせ給う
2　主さま　あなたは　わが御光よ！
　我れをつらぬき　かがやきたまえ
3　主さま　あなたは　わが肉の霊肉
　あなたを喰い　永遠にぞ生きん
4　主さま　あなたは　わが骨の霊骨
　わが脊椎に　聖手按きたまえ
5　主さま　あなたは　わが血の血なり
　天の生命を　ひとにわかたん
6　主さま　あなたは　愛の愛なり
　この愛をもて　ひとを助けん
7　主さま　あなたは　歌の詩歌なり
　生涯の限り　聖名を讃えん！
8　主さま　あなたは　わが身のすべて
　あなたと一如　ハレルヤ　アーメン

●召団讃歌Ａ52「エン・クリスト」

召団讃歌Ａ52「エン・クリスト」（1988/8/5 作詞　讃美歌315「浮世の荒波」の歌調）

1　「我こそまことの　葡萄の樹なるぞ

わが父は農夫　汝（な）れらは枝なり
2　汝（な）れら我に居れ　我れも汝れらにぞ
然（さ）らば祈れよ　必ず成るべし
3　父我を愛す　その如く我れは
汝らを愛す　わが愛に居れよ！
4　わが愛の如く　汝らたがいに
愛せよ助けよ　自由の律法（おきて）なり」
5　主は我らのため　生命を棄てたり
愛の極みこそ　棄身の愛なれ
6　主の遣わし給う　聖霊助主（みたまたすけぬし）
祈りに應（こた）えて　み力を賜（たも）う
7　この世紀末の　危機の世界にて
我らはひたすら　聖霊（みたま）の人たらん！
8　父御子聖霊の　一如の現実（うつつ）に
我ら投身（なげみ）して　一つとせられぬ

●キリスト讃美

我々はいかなる境遇にあっても、どんな環境においても神・キリストを讃えること、それが生活の基調になっていなければだめです。悩みにも苦しみにも何もかにも神を讃える。我々の生涯は、いかなるところにおいても神讃美、キリスト讃美ということ。神を讃え、キリストを讃える。聖名を讃えることが始めであり終りであるということです。

ヨハネという人は優しそうにみえて、実は非常に力強い人なんです。パウロに負けやしない。私はこの頃になってそのことが分かった。パウロの方はかなり理屈が多いけれども、ヨハネは断定的にものを言っている。素晴らしいね。

聖書ほど力強いまた面白い本はない。だから、我々は聖書一巻をポケットにいれて電車の中でもどこでも読んでいればいい。そこはもう直ちに天国だ。聖書は盛んなる書、「盛書」と言ってもいい。内容の盛んなる書です。

キリストの中に自分を投げ入れることくらい素晴らしいことはない。「信ずる」なんて言わない方がいい。「信仰」「信ずる」ではない。「一つ」になっている一如の世界です。

「キリストに自分を投げ入れている世界」

です。そういう非常に霊的な現実から、一般にいわゆる「信仰、信仰」と言っているものは反ってずれている。

●福音の原点に帰ろう

これは私がいつか書いたものだな。

「聖書六十六巻の中心は福音書である。しかし、一般に、そのキリストの福音はむずかしいもの、つかみにくいもの、あるいは平板なもの、気の抜けたものにされているのではないか。

いわゆる「聖書研究会」的に学んでも、それでは知的信仰の域を脱しがたい。文学的興味から読むならば、それは宗教的情緒を養う程度に過ぎないであろう。哲学的角度から探れば、宗教哲学的理解の硬いものに終るであろう。

大体キリスト教という表現がすでに福音の本質からのずれを感じさせる。福音は身につかねばやまぬ真理であるから、むしろ茶道、書道等というように「キリスト道」というべきだと思う。

聖書は教訓や説教の書ではない。神はイスラエル民族という「頑固な民」に呼びかかり、つかみかかって、これを民族史を通して鍛錬し、南北両王国滅亡の前後に預言者を輩出せしめ、国亡びて信仰あり、ともいうべきイスラエル民族の本質を実証せしめ、ついにキリスト・イエスを通して全人類救済の道を開いた。そういう神の歴史的なドラマ（活劇）である。世界歴史が劇ならば、その劇中の劇が聖書である。絶対界からの霊光が相対界の闇の世を照破して、これを光の世界、愛の楽園に化せんとの神の本願を展開しているドラマである。

であるから、我々自らが劇中の人物と成る態勢で身読するのでなければ、つかめない真理である。

この大聖劇の主人公は正にキリストである。そのキリスト自らが、神の前に全くつぶれ、平伏していた人である。その彼に神霊が充満し聖意が体現するのであった。彼自身は徹底的に無私の人であった。だから私はキリストを「無者キリスト」と呼ぶのである。無者即無限無量者なのである。福音はこの人の全実存から迸ってくる力あるおとずれである。

このおどろくべきキリストに体あたりして、大歓喜の生命と光と愛に浴する消息を体受していただきたい。福音の原点に帰ろうではないか。」（小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』のパンフレットより）

とにかく、聖書は本当に楽しい本ですよ。そして、力が来てしょうがない、ありがたくてしょうがない。どん底に立って、人を担ぎ上げるような力はキリストがくださるから。我々は自分自身がキリストの言霊とならないとね。そうすると、熾（さか）んなるかなで、絶対に行き詰まりを知らん。いわゆる「信仰」ではない。

私は皆さんと御霊にあって聖言の中に自分を投げ入れる、こういう集会が一番楽しい。あなた方も楽しいでしょ。集会が終わると、もう力に満ちているんだ。